江右陽明学者劉陽と『吉州正気』

江右陽明学においては、聶豹・羅洪先・鄒守益といった著名な思想家のほかにも、地方での講学・政務・郷里教育の場において活躍した学者群が存在する。彼らは功名や官位が高くなかったこと、もしくは資料が少なかったり、保存状態が良くなかったりといった理由から、これまであまり注目されてこなかったが、陽明学を真摯に実践し、その伝播普及に努めたという点においては、無視できない存在である。劉陽（1496-1574、字は一舒、号は三五）は、その中でも非常に代表的な人物である。

劉陽は江西安福の出身で、若い頃に劉曉に師事し、これを契機に陽明学に接触し、陽明に面会にして、陽明に高く評価された。『明儒学案』江右王門學案四では「東廓（鄒守益）の没後、江右の学者たちは皆、先生を頼りとした（自東廓沒、江右學者皆以先生為歸）」と評されており、江右陽明学の伝播において重要な存在であったと考えられる。

しかしながら、劉陽の文集の保存状況は良好とは言えず、現在入手できる点校版『劉三五集』は、安福博物館に所蔵される残巻をもとに整理されたもので、貴重な資料である。実際、安福博物館本の他にも、日本尊経閣には劉陽が編纂した『吉州正気』全四巻が所蔵されており、発表者の知る限り国内外に現存する唯一のものである。『劉三五集』にも収録されていない。

『吉州正気』は、吉州における歴代の忠義の士の事績を編纂した書物であり、風骨を育て、正気を弘揚することを目的としたものでる。忠義の士の詩文・奏疏のほか、序文や行状といった附録も収められている。附録には、羅洪先、鄒守益といった陽明学者のものが多く含まれている。

今回の発表で、劉陽の講学活動および編纂活動を通じて、陽明学が江右地域どのように伝播されたかを明らかにし、また、これらの陽明学者がいかにして江右出身の文人として独自の「正気」文化を構築していったのかを明らかにしたいと考えている。